

# 動感形態の発生障碍に関する例証分析的研究

## Zur Exemplifizierungsanalyse über die genetischen Störungen der Kinästhesiomorphe

キーワード：動感形態、発生障碍、例証分析

金子 一秀

### I. 本論の射程

日常生活において何か新しい動きかたを覚えようとすると、自分の手足が思い通りに動かない不自由さを感じることは多い。慣れない包丁を使う動きは手を切る怪我を恐れての不自由さとなる。しかし一般的には、失敗や成功を繰り返しているうちに自由に動ける身体を獲得できるから、動きかたは量的反復によって学習されていくと考える。学習結果は単なる量的反復と因果を結ぶから、できないことは反復回数の不足となり、さらなる反復を求められるのが一般である。

しかし、スポーツ指導場面では「やろうとしてもできない」ということが起こる。客観的事実としては具体的な運動が呈示されない。動きを発生させようとする以前に立ち止まってしまうこの問題は、きわめて奇妙な現象であり「そうしたい」と思っても身体が全く動かない。普通「したい=できない」というパトスの世界<sup>(1)</sup>は、「思うようにできない」という位相にとどまる。包丁が上手く使えないとしても包丁を持つことはできるだろうし、不器用でも何かを切ることはできる。包丁を持つと思ったとき、そこに向かって手が全く動かないとすれば生理学的な異常を疑うことになる。ところが、スポーツ指導場面では、このような情況に陥る選手は決して少なくない。

今回の例証となるのは、後転とびを「やろうとしてもできない」という現象である。その原因は、当然物理時空系に展開される運動変化に差異を求めることはできない。それは先行している動感形態は、不可疑的に実在するが、延長的な実体はないから自然科学的な運動分析の対象とならない。実践場面ではこのよう

な事例は決して珍しくないし、いままで指導者は試行錯誤しながらもこれをうまく解決してきた。運動学としての厳密分析を行わない事例報告は単なる練習日誌的記述と批判されても仕方がない。しかし、身体知の問題をブラックボックスに入れた空虚な形式的指導方法論の有効性が何の疑いもなく語られることも奇妙である。

本研究は平均台の後転とびを例証に取り上げ、「やろうとしてもできない」という現象に陥った選手が試合で実施に成功するまでの練習経過に運動学的厳密分析をかけ、その身体知の発生問題を明らかにしていく。それは、精密科学的な方法論が確率論に逃げ込むのに対して、本論ではその中に蔵されている動感化現象に切り込み、その本質法則を導き出すのを企図とする。これによって実践的運動学の指導方法論の構築を試みようとしている。

### II. 運動生活史への遡及

今回の事例は、後転とびが怖くてできなくなった選手が、平均台での「後転とび～後方かかえ込み宙返り」という組み合わせ技を試合で実施するまでの身体知の形成過程の問題を解明しようとしている。そのため、本人の内的・外的運動生活史<sup>(2)</sup>を明らかにする必要がある。

ここで例証化される選手は現在大学1年生で、体操を始めたきっかけと、後転とびが怖くなっていった情況を次のように説明する。

「友達がやっているのをみて体操競技がやりたくなくなり、小学校1年生からスポーツクラブに入会した。」

その後大学に入学するまで同じスポーツクラブで練習を続け、小学校時代にロンダート後転とび連続などを習得し、試合に出場するレベルに至っている。ゆかの後転とびは小学校3年生くらいで覚えたが、その練習段階はエバーマットに背うちをする導入練習から、幫助による後転とびの練習をし、その後一人でできるようになったという。

「ロンダート～後転とび～後方かかえ込み宙返り」を覚えたのは小学校5年生から中学1年生にかけてで、最初はロンダートからかかえ込み宙返りを覚え、それができるようになるとロンダート後転とびからかかえ込み宙返りを行った。中学2年で2回ひねり宙返りを覚えたがその練習段階もかかえ込み宙返りと同じで、ロンダートからできるとロンダート後転とびから2回ひねり宙返りという順序をとった。

後転とびが怖くなってきたのは中学1年生の頃からで、もともと後方系は怖かったと本人はいう。特に中学1年生あたりから「考えて練習をする」ようになってさらに怖くなり、できなくなっていった。「考えて練習をする」ということを本人に説明してもらくと、後転とびがつぶれたり、うまくいかないときに「蹴るときはこうしよう」などと考えることだという。そのように考えて練習をしていくうちにさらに怖くなりできなくなっていった。

高校1年生の4月まではロンダート後転とび2回ひねり宙返りまで行っていたが、それも練習ではできないまま試合でだけ行うというような状況であった。その後は後転とびを行わずロンダートから直接2回ひねり宙返りを行うようになった。しかし、規定演技には「ロンダート～後転とび～後方かかえ込み宙返り」が入っているので、高校3年の夏までは試合では後転とびを行っていたことになる。しかし、それも練習では全く行わず試合の時だけ行っていたという。

平均台の後転とびは小学校5・6年生で覚え、台上でも行うことができていた。しかし、その習熟レベルは演技に組み入れるほどのものではなく、個技としてできたという程度である。これも、ゆかの後転とびと同じ中学1年生頃から怖くなり、その後一切やらなくなったという。

### III. 身体知発生現象と動感促発の処方化

大学に入学してからも体操競技の選手を続けるためには、過去に覚えた技だけを維持していても競技力の向上は望めない。高得点を得るには高難度の演技構成と減点の少ない技の実施が求められるからに他ならない。しかし、入学してから1ヶ月以上経っても、本人はゆかでも後転とびは一切練習をしていなかった。他の種目の競技レベルは高いものがあり、5月に本学の全日本インカレの候補選手とした。そのことによって具体的な演技構成を考える必要に迫られ、平均台の「1つの宙返りを含む、少なくとも2つの空中局面を伴う技からなるアクロバット系シリーズ」という演技構成要求を満たすため<sup>(3)</sup>、「後転とび～後方かかえ込み宙返り」のトレーニングに入ることになった。

中学1年生頃から全く練習をしていなかった平均台の後転とびを5年ぶりに再開するには多くの困難があった。特に「怖くて動けない」という問題の解決は苦労を強いられた。しかし、最終的には練習を開始して2ヶ月で全日本学生体操競技選手権大会の平均台演技で「後転とび～後方かかえ込み宙返り」を実施することができた。演技中にこの技で落下をしたが、試合という難しい状況で実施することができたことはとりあえず成功と考えてよいだろう。それは単に「試合になればできる」という匿名的位相ではない。練習で本人の身体が了解できるコツを見つけることは、「私は動くことができる」という能動的志向形態の発生である。これは図式化領域における形態発生の問題に取り組んでいることが意味されている。

#### 1. 言語的自己指示の動感空虚性

全日本インカレ出場を目指し高いレベルの試合に向けて「後転とび～後方かかえ込み宙返り」を覚えることになった。しかし、平均台の後転とびを行うのは5年ぶりくらいという。

平均台の後転とびの練習に入る前にゆかで幫助をつけての練習から行った。最初に問題となったのは、「手を振ろうと考えると身体が動かない」ということである。中学の時に「考えるとできなくなった」ということと同じ動感化現象が想起されるのである。「いつ手

を振るか、どのように振るか」などが全く分からないという。そこで、「考えることはしないで腕を振る動きをおぼえよう」という動感目標を構成化した。後転とびも問わず腕を振ることと膝を曲げることから腕の振りに至るメロディーを指示した。ここでは、とにかく「技の開始リズムを覚えること」「腕を振る感じ」「膝を曲げる感じ」などを我が身にありありと捉えることを要求した。そのままで補助つき後転とびを実施することはできたが、何回かするとすぐに身体が硬直してしまい動けなくなってしまう。そのときに、「なぜまたできなくなったのか」と聞くと、「考えるとできなくなる」と昔と同じことをいう。「今考えていることはどのようなことか」と聞いたところ、本人は「膝を曲げてから腕を振ると・・・」という。何も考えずにリズムだけを純粋に捉えようとしているときは良いのだが「考えてしまう」と全く動けなくなるという。そのときの「考える」とは内言的な空虚な自己指示である。言葉はその裏に意味を持つ。英文を上手に読んでも意味が全く分からないという形式的な発音もある。動きながらの自己指示においても「自分ではできる」などという空虚な指示によって、蔵された動感を引き出し、充実させる動感指示言語が展開されることも現場では珍しくない。

つまり、言表される言葉そのものが問題の中心ではなく、その裏に蔵されている動感意味核がどのような地平構造をもつかが重要となる。その動感意味核そのものがいわゆるコツであり、そのコツを聞き出すということは、その人の動感地平性を知ることである。ここでは記号としての言語がコツを意味しているのではない。上手にできる選手集団から、そのコツを聞き出し、その言語を単なる記号として理解し統計処理したところで、その裏に隠れている間動感志向性は見えてくるはずもない。

動きのリズムそのものを再現しようとしているときは動けるのだが、それは確定化に至らず漠然としていて、その言語的思考が邪魔をしてくるようである。過去に「考えよう」として工夫をしながら空虚な自己指示を出していた習慣は根強い。「膝を曲げてから腕を振る」という自己指示は動感地平を充実させるにはあまりにも複雑すぎる。「膝を曲げる」ということはどのくらい曲げるのかなどという余計な計量化思考が邪魔

をする。しかし、本人は具体的な自己指示を行う習慣がきわめて強い。したがって、言語的思考が分散しない数字によって蔵された動感志向性のメロディーの充実を図った。「1で膝を曲げて手を後方に動かし、2で振る」という指示の中で、「膝を曲げた感じ」「腕を振る感じ」を顕在化させていった。とにかく、ここでは「1」という時には「膝を曲げると考えてはいけない」と指示をしながら、1・2と自己指示を出しながらも、そのときの膝が曲がった感じや腕を振るときの感じを捉えさせた。こうして補助で後転とびが再び図式化できるようになった。

小学校時代にすでに平均台の後転とびを習得はしていたと聞いていたが、実際にやってみると技術的なレベルの高い後転とびであったことには驚かされる。その後何回かできないときがあったが、そのときはやはり「いつ膝を曲げるのか、いつ腕を振るのか」などという言語的思考が邪魔をしていたようである。「とにかくリズムを感じること」と「考えるのは1と2」ということをテーマに補助で後転とびの反復練習を続けていった。

## 2. 潜勢的動感形態の充実

技を開始する際に「1・2」と内言による自己指示を使いながら直接補助で実施しながら、空虚ながらも後転とびという動感形態を把持の把持へと体験のなかに沈み込ませていった。すでに過去に後転とびができていたという事実は、空虚な記憶に動感形態が捉えられているとも考えられる。しかし、それがどのような動感形態かは生化しないし、そのような障害を持った空虚形態を充実させることはすべてふり出しに戻ると同じことになる。動感形態の発生は常にゲシュタルトクライスという円環構造を持つ<sup>(4)</sup>。だから、過去の記憶に残っていた空虚形態は、現前化される可能性はないから修正されるということはない。外部視点に立って、過去にできていた後転とびの記録映像を探して比較しても大きな違いは見られないかもしれない。動感形態の違いは映像化された等質時空系の図形変化に求めることはできないし、〈今・ここ〉で形成する動感形態は新しい動感形態の発生に志向されている。

「私は動くことができる」という動感化現象は、これから行われる技が潜勢的に身体で了解されていること

が意味されている。「1・2」と考えながら、直接補助がついたところで、実際に本人が動きを発生するのだから、そこでは空虚ながらも潜勢的な動感形態は生かされている。しかし、それはまだいつ壊れてもおかしくないほど頼りない。「腕を振ると考えるとできなくなる」という症状は、「腕を振ろうと考えた瞬間に後転とび全体の動感メロディーが消えてしまう」のである。単に腕を振るだけでは後転とびにならないかも分からない。つまり、未来に何が起こるか全く分からないのである。

我々がコツを見つけたというときは、それは動感メロディー全体の流れの中に力点を見つけたことである。その力点となる動感意味核は今まで問題のあった動感形態をより心地よい動感メロディーを奏でる新しい動感形態へと変身させるのである。コツを見つけたとたんに動感メロディーが流れだすのであり、その動感メロディーが奏でられたときコツが分かったことである。だから、コツを掴むのは「先も後フリス、ボステリウスも

ない同時発生である<sup>(5)</sup>。  
しかし、我々の身体化された肉体は物質的側面も持っているので、コツを見つけてうれしさのあまり何度も反復するうちに疲れ果て、その崩れも気づかずに反復練習をやっていると、コツが狂ったという現象が生じるから注意しなければならない。

### 3. 狂った「私のコツ」の再構成

その後、選手は全体のリズムが何となく体感できるようになってきたのか、開始の動きかたに関心を持つようになってきている。本人に「どうしたら上手くなるのか」と聞くと、「1で膝を曲げて止まってから、2で腕を振る」という。今まで、1・2という合図と絡み合っていた動感志向性がより充実してきたことになる。実際にできたこのコツの言表は、裏に動感感覚がへばりついているから「できる」のであり、それは今までの「考える」とは様相が全く違う。

言葉から考えれば「膝を曲げて止まる」ということは物理時間的な停止があると考えたい。確かに、そのような動きを外部視点から眺めると、物理的静止があるともいえる。しかし、完全に動感意識流が停止したら、次の動きかたは発生するはずもない。一般的な後転とびの開始リズムとはずいぶんかけ離れたこ

の動きかたは、間違っただけのやり方として指摘する向きもある。しかし、この技をどうしても実施することができなかった本人が見つけたコツを頭ごなしに否定できるものではない。

相手の動感形態を捉える促発身体知に「代行能力<sup>(6)</sup>」があげられるが、このような物理的停滞現象に引きずられた代行をしたくなるのが常である。自らがこの技が実施できるのであれば、物理時間的停止をこの局面で行うことは実際に違和感を感じる。しかし、常識的でない「違和感のある動きかた」だから間違っていると指摘できるものではない。この問題は常識が通用しないのであり、全ての先入見を排除しなければその本質は明るみに出てこない。

「治療」は「患者の苦痛の軽減ないし除去」と「正常機能からの逸脱の修復」という2つの共属的でない意味を含む<sup>(7)</sup>。特に今回の促発コーチの場合は、恐怖によって実施が困難となる本人の苦痛の除去によって試合で実施できることが第一の目的となるから、我々の常識は一度括弧に入れる必要がある。

指導者が促発身体知で代行を行うときには創発身体知を始原とするが、ややもすると自らの経験財である動感形態から抜け出せないこともある。このような選手の後転とびを代行しようと試みるときも、潜勢的に構成する代行形態には、指導者自らのもつ違和感を拭い去れない。精神科医が患者に現象学的な治療を試みるとき、違和感なく相手がよく分かることは医者も患者になってしまうのかという問題と似ている。このような問題は違和感を持ちながらも超越論的次元にまで踏み込まないと本質分析は可能にならない。

少なくともその女子選手の「私のコツ」として動感形態が充実し始めたのだが、それが「我々のコツ」としてやがて伝承レベルまで引き上げられていくものと安易に考えることは難しい<sup>(8)</sup>。特殊な事例の「苦痛からの解放」という「私のコツ」なのか、同じような問題を抱える人たちの「我々のコツ」になり得るのかは今後の検討課題となろう。だからこそ例証分析による一例研究は純粹記述として重要な意味を持つことになる。

### 4. 平均台上での実施

ゆかでの後転とびの図式化が一応の定常を示し

た後、平均台上での実施へと移った。平均台で実施するときは、ゆかや違いの着手や着台面に強い制約がある。幅10cmの台上に手を着き、足も正確に台上に乗らなければならない。実際に練習用の低い平均台上で実施しようとしたとき、ゆかでの実施とは違い手を前後に着かなければならず、そのことは全く新しい問題で再びできない状況におちいった。本人に「何に問題があるのか」と尋ねると「平均台を想定してゆかで練習をしていた時、手を前後に着こうとしたのだが時々左右に手を開いて着いてしまうことがあった。だから、台上でも手を左右に開いてしまい、手を台上に着けないのではないかと考えてしまって怖くなり、再びできなくなった」という。加えて、「手を前後に着こうと考えるとさらに動けなくなる」という。

ここで「腕をどう振るか考えるとできなくなる」という最初の段階と同様の問題が再び浮かび上がってきた。手を前後に着こうとすることは腕の振りとの関係もとぎれるし、切り取られたこの動感志向性は、予動的な動感メロディーを奏でることに悪い影響を与えることになる。具体的な処方としては、後転とびに入る前に何回か腕を振りながら目の前で手を前後にする練習を行わせた。本人には「手をどう着くかは自分で考えるのではなく、あらかじめどのような着きかたをすればよいかを何回かやってみて、後は自分のコツを信じて身体に任せなさい」と指示した。技の練習で新しい動きかたを動感形態に組み入れていくとき、その技の実施の前にキネステーゼアナログンとなる動きかたをあらかじめ動感形態にすり込むことはよく行われる。注意深く練習場を眺めていれば、技の実施の前にキネステーゼアナログンとなるいろいろな動きを行っている選手は多い。次に行うべき動きかたの注意点を内言で呪文のように唱えても動感問題はなかなか解決しない。マイネルのいう「感じの呼び込み<sup>(9)</sup>」は、新たに修正すべき動感形態を潜勢的に形成することに貴重な示唆を持つ。

技を実施する際に、きわめて部分的な動きかたに強い能動志向を持つと動感メロディーが崩壊することがよくある。その場合は、基礎技能として予備練習で、実際に習得すべき動感形態の動感素材となり得るキネステーゼアナログンを匿名的に受動世界に埋没

させるなどの方法が挙げられよう。手を前後に着くという動きかたに能動的に志向することは、せつかく予動的に形成された動感形態を崩壊させる可能性がある。したがって、私のコツに匿名的にすり込ませるために予備動作を行い受動的な刷り込みを企図した。過去に行っていた技であることから、受動身体知は台上の手の着きかたを知っていると判断した。実際に平均台での実施では一度も手を左右に開いて頭から落ちることはなかった。本人は、「私は動ける」とは事細かに動きに注意を向けることができる「意識の奴隷<sup>(10)</sup>」の身体になることと考えているようである。本人のそのような身体道具説の常識を拭い去るには時間がかかったが、台上での後転とびは一応できるようになっていった。

## 5. 「見る」と「見える」の問題性

本人が自ら納得のいく「止まってから腕を振る」というコツは、とりあえず後転とびを行う際の潜勢的な動感形態をより充実させていた。そのことによっておぼろげながらも「できる気がする」という動感意識が芽生えてきた。ところが後転とびだけを演技に使うわけではなく、後方かかえ込み宙返りを組み合わせなければならない。「後方かかえ込み宙返り」はゆかでの「後方かかえ込み2回宙返り」の練習でなじみをもっている。平均台の技として実施するには、組み合わせ局面で片足ずつ着台することになり、両足踏切のゆかの技とは動きかたが違う。

ゆかでのその場のかかえ込み宙返りは、後方かかえ込み2回宙返りの練習段階で実施していたので、低い平均台で足を前後に開いてその場からの後方かかえ込み宙返りを実施させた。また、足を踏み外しても安全なように補助台をおき反復練習をした。この技に関しては多少の怖さはあるものの後転とびほど問題は生じていない。後方系で天地が逆転する運動方向に対して恐怖感をもっているのだが、とくに後転とびに強い恐怖感を持つとはいっても、後転とびは怖くても後方倒立回転に関しては全く問題なく行うことができる。後方という頭越しの運動方向すべてに同じ恐怖感を抱くわけではないところに今回の事例の複雑さがある。「後方倒立回転がなぜ怖くないのか」と尋ね

たところ、「ゆっくり景色が動いているから自分がどこにいるかが分かる」と答えた。一方、「後転とびは速くて自分がどこにいるかが分からなくなる」ともいう。我々は運動中でも目を開けてはいるが、視覚情報を意味づける志向性は光学的刺激を全て捉えているものではない<sup>(11)</sup>。そのことは、判じ絵が人によって見えたり見えなかったりすることと同じである。

試合後に分かったことだが、この後転とびの練習の時、開始の姿勢から上体を振る瞬間は目をつぶり、手が着台するときに目を開けるということを行っていたそうである。後方倒立回転ではゆっくり見える景色が、後転とびでは速く見えることが怖く「目を閉じることを自分で工夫していたようである。現在もこの技は修正中であるが、目を開けていても景色が見えないようにするため、「開始姿勢から腕を振るとき、目もひっくり返って白目にして、自分の後頭部から手を着くところを見るように」と指示している。目がひっくり返るほど着手位置のゆかを速く見る意識を強く出すことは、たとい途中の景色が目の中に入ってきててもその志向性は景色を捉えることにはならない。現在は、目を開けてこの技を行うことができているが、景色が気になるとまた恐くなる可能性は消えていない。

通常でも我々は技の最中に景色が見えると空間定位に混乱が生じることがある。また、見てはいなくても同じ技を屋内で行うときと屋外で行うときには違和感を感じる。ふだん我々の目はまばたきをしている。それは一瞬とはいえ目を閉じている現象である。まばたきを気にしてみると確かに一瞬でも目を閉じる自分の生理学的反応を捉えることができるが普段は気にもならない。このことから、後転とびの頭越しの瞬間に景色が見えることはその志向性が揺らぐところに問題があると考えられる。景色が見えることは「見てしまう」ことであり、それは「見る」という志向性を遮断して「見えないようにする」のではなく、それを改善するのは「見えてしまう世界を超えて見る」という志向性を持たせることになる。

## 6. 組み合わせ局面における発生障碍

後転とびから宙返りへの組み合わせの練習は、その場からの宙返りが台上ですべてできてからゆかでの練習

に入った。とりあえず後転とびを行って、静止してから新たに腕を振り直してその場からのかかえ込み宙返りという促発指導を行った。

後転とびの動感形態とその次のかかえ込み宙返りの動感形態を動感意識流のなかで序列化させることは、組み合わせ局面での先読み現象を主題化するためである。2つの動感形態を組み合わせることは本人も知っているので、2つの技の実施のなかで組み合わせの可能性を探ることになる。やがて、本人の工夫で2つの技を組み合わせることができてきたが、いつでもできるわけではない。しかし、本人は「うまくつながらないときがある」と動感評価ができるようになっていた。「どのようなときに上手いかわからないのか」と尋ねたところ、「後転とびで足がおりてきたとき、いけそうなきは宙返りができるのだけど、そうでないときはできない」という。「足が下りてきたとき」という言表は、その組み合わせ局面が消極的であると判断される。

我々の身体は物質身体も同時に持ちあわせているが、動感世界でも物質性を捉えることは珍しくない。「足が下りてきた」というときは、自らが足を下ろすとしても、外力に委ねているという消極的な動感意識と考えられる。そこで、「足は下ろしてくるものだ」という指示の中で、足の動感意識に能動性を志向させた。かかえ込み宙返りにいけるかどうかの判断は後転とびで倒立位になったあたりでは決断しなければならず、そこでうまくいかないときは後転とびで止める必要がある。動感形態の局面化がまだ上手くできない選手が、中断してはいけないところで技を中止することで怪我をすることもある。そのことからこのような発生障碍に陥る選手も少なくない。

指導者が動感形態を習得させるとき、その技の実施で問題が起こる局面を動感感覚で捉えていなければならない。動感形態の〈局面化構造〉を知らない指導者は、選手によかれと思う助言をいっぱい詰め込んで、かえって運動をできなくさせてしまうことさえある<sup>(12)</sup>。また、技の失敗に対して動ける動感素材も持ち合わせていなければならない。そのためには、局面化される動感形態の縁どりを捉える必要がある。「私は動くことができる」ということは、広大な動感地平の中で縁どりされた動感形態を志向する<sup>(13)</sup>。この

縁どりがなく、もしかすると失敗する」という嫌な予感ばかり広がってしまう。それを止めることができるのは自らの危険を回避できる動感素材であり、その存在は「失敗しても危なくない」という縁どりとなり、動感形態をさらに磨き上げる原努力を触発することになる<sup>(14)</sup>。

ゆかでの練習をしながら、発生障碍のあと始めて後転とびかかえ込み宙返りを平均台上で組み合わせる練習に入った。平均台では着地面が狭く、幅10cmの台上に足を乗せるというわず幅は非常にデリケートである。最終的には125cmの台上で行わなければならないが、着台の時、足を踏み外すことがもっとも危険である。そこで、低い平均台での練習の中にかかえ込み宙返りの着台の先読みをテーマにし練習に入った。着台の時に「平均台が見えたか見えなかったか」と聞きながら、着台への先取りを強くしていった。それは、「見て～する」というような物理時間的順序を意味しているのではない。着台面を見ようとする志向性は見える前に先取的に着台面を動感形態の中に形づくられることになる。それは、私の空間を形成することであり、我々の身体は空間や時間に住み込むのである<sup>(15)</sup>。動感意識の中に着台面が存在するからそこを見に行くのである。

これが我々の「自己運動<sup>(16)</sup>」であり、コンピュータ制御によるロボットを作る場合と決定的に異なる。ロボットの場合、センサーによって外部からの情報が収集され処理が行われる。そこには一方通行的な時間順序が成立する。だから、処理時間をより短くするために高速の演算処理回路が使われることになる。しかし、処理時間をいくら微分しても情報入力と運動の同時性は決して生まれない。ロボットに運動を再現させる場合と我々の自己運動とは決定的に違う。

しかし、実際に練習を行っている選手達も「見えたからできた」などと言うから、いつのまにか「見ればできる」と信じたり、また指導者も「よく見ていないから失敗するのだ」ということになる。ゆかの音楽伴奏に合わせて動くとき、聴いてから動けばそこに物理時間差が生まれ、永遠に曲に合わせて動くことはできない。それにもかかわらず、動きと曲が合わない選手に「よく聴いて」といえば、ずればひどくなるはずである。

しかし、実践ではそのような指摘はあまり問題にならない。というのも、選手は指導者の指摘を「本当は聴いていない」からに他ならない。

低い平均台で落下を捉える縁取り志向形態が生まれてきてから、実際の高さの平均台で実施することになる。試合用の平均台の上で立れば、その視線の高さは2メートルを遙かに越える。低い平均台での練習の成果はそう簡単に発揮することはできない。実際に、試合用の平均台上で実施しようとしたら、全くできなかった。しかたなく前の練習段階である低い平均台に戻って再び練習を行ったが、そこでは「低い平均台ではよかったと思うが、試合用の平均台でやったらダメだ」という動感価値意識に変化が生じた。いままでの情況投射化作用は低い平均台と絡み合っていたが、高い平均台で「やろうとしてもできない」経験は、新たに高い平均台のための練習というコツの探索に向かわざるをえない。情況と固定的に結ばれている投射化作用であればこのようなことは起こりえない。全く異なる情況でさえ志向形態へと刷り込めるのであり、やがて「できる気がする」という動感志向形態の了解は、初めての試合用の平均台でのこの技を可能とする。

## 7. 試合における発生障碍の克服

実際の試合での演技の前に数日間試合会場での練習が許可される。特に平均台は一人の練習時間を割り当てることが多く、会場練習では一人3分弱であった。その時間内に自分の思う練習を展開しなければならず、そこでは何をどこまで練習するかという計画性が重要となる。また、1つの技の練習がうまくいかないことに躓き、しつこく練習を行えば、それだけで練習時間が終わってしまうから、予定された自分の練習を淡々と行うことが要求される。そのような中で、今回初めて平均台で「後転とび～後方かかえ込み宙返り」を実施するという課題は非常に難しく、会場練習の1日目は後転とびを実施するだけになってしまった。後で聞いたところ、会場練習で「足を踏み外すような落下をしたくない」と強く思っていたら後方かかえ込み宙返りまでつながらなかったという。練習の初期段階で起こっていた昔の失敗でも、いざ試合となると

急に気になるからやっかいである。

2日目の会場練習では前日よりさらに短い時間での練習となった。全ての種目を練習する時間はなく、平均台だけ練習をする予定で、何とか「後転とび～後方かかえ込み宙返り」を1回だけ実施したが落下した。そのできばえは今まで練習してきた動感形態とはずいぶん違うものであり、評価されるものではない。しかし、試合会場でこの技を実施したことは自らが形成してきた動感形態充実への架橋の契機となる。「とりあえずできた」という事実は次に「どうしたら練習のような技ができるだろう」という関心へと向かう。逆に全くできなかった場合「試合ではできるだろうか」という不安が生まれ、今までの練習で培ってきた動感形態のコツさえも揺らぐ。

本人はとりあえず「やっておかなければ」という思いでやっただけだという。「やらざるを得ない」という自らの決断だけでその技を実施できたことは、受動地平における身体知は「後転とび～後方かかえ込み宙返り」を了解していることになる。しかし、「やらざるを得ない状況」との関わりの中で身体が了解することがあるから、ふだん「やろうとしてもできない」選手にひどい叱責を浴びせ、その恐怖感によって充実を促す指導者も後を絶たない。

試合当日、平均台の演技でこの技を実施することはできたが落下した。それは、今まで練習してきた動感形態の枠組みには入るものの、決して良いできとはいえない。中学1年生のとき恐怖心からこの技の習得を断念し、5年ぶりに練習を再開し、新たに後方かかえ込み宙返りという技を組み合わせることは大変な努力が求められたに違いない。その技の実施ができたことは長い練習期間の中で、自らがその技を使いたいという〈原努力〉が動感充実を支えてきたといえる。キネステーズそのものは単なる意欲の様態を示しているのではなく、目標を目指しての意志の道程として構成されるのであり、何かに向けての能動的な努力のなかに習練する道程が形成され、動感能力を目指して歩き続ける道になる。身体知を求めて、〈私が動ける〉ようになるために何度も反復して身につけていく〈原動力〉になるのは、〈原努力〉であり<sup>(17)</sup>、空虚から充実への動感発生を支えることになる。

小学校3年生頃にゆかの後転とびを覚え、5年生頃に平均台での後転とびを覚えた。中学1年生頃にゆかの後転とびが上手く実施できないことに対して「考えて練習をする」ようになり、後転とびに対して怖くなり、怖くてできない動感化障壁に陥った。しかし、ゆかの規定演技に後転とびが入っていたので、高校3年の夏の大会までは〈試合だけは〉後転とびを行っていたという。「試合になればできる」のなら「本当はできる」ので、それは自信がないだけであり、メンタル面を鍛えれば解決すると考えるのが一般的である。危険を回避することが察知できないまま、試合という追い込まれた状況で、自らの命を絶つほどの覚悟で後転とびを行っていたのであれば本質的な問題は何ら解決してはいない。

人間は高等動物であり、自らが危険を察知し身体が動かないことがあったとしても、他我によって拒否する身体知を強引に了解させることもできる。だから、他の動物にはない自殺という行為が人間社会には存在することになる<sup>(18)</sup>。「試合になればできる」ということは、動感意識の強い充実によるものであり、それは「自殺することができる」と同じ次元にあることに注意しなければならない。練習場面でも「やらない」選手に叱責を浴びせたり、ときには体罰によって強引に運動を行わせ、「やればできる」と褒めたところで、それは本人にとって苦痛以外の何ものでもないからである。

#### IV. 結語ならびに展望

技を行うのが急に怖くなり、全くその技ができなくなることは、体操競技においては決して珍しいことではない。今までその技ができていた空虚な記憶痕跡から「やればできる」と本人は思っている、いざ「やろうとしてもできない」。一つの技が生理学的身体の運動の寄せ集めと考え、手足の動きを部分的に確認したところで、そこには何らの異常もない。「畳の上の水練」では泳げるようになれないということは誰でも知っているのに、いまだ生理学的身体の部分運動の寄せ集めが生命ある運動になると考えてしまう。自然科学的に運動を分析することは、本人の動感世界とは全く無縁の外部視点に立つことであり、例えば、「後

転とび」という技は等質時空系に切り出された瞬間の動きの連続と考える。瞬間の動きとは実際には存在せず、それは静止であり運動ではないはずである<sup>(19)</sup>。しかし、それでも身体運動を対象分析できると考えているのは、抜け落ちた瞬間映像に運動を認めているからである。分析のために映像化したものが運動ではなく、捉えられなかった映像に運動の本質があるという奇妙な運動分析の矛盾に気づかなくなっている。

スポーツ指導実践場面では様々な問題が起こっている。スポーツの自然科学的な研究結果からはじき出し、排除された人までも現場の指導者は何とかしなければならぬ。それは、まさに医師の治療と同じ問題を抱えている。特に今回の例証は、対象そのものが実体として存在しないのだから、自然科学では取り扱えるはずもない。拱手傍観して恐怖を克服する心理状態を探ったところで、そこから身を守る動きかたを生み出せるわけもない。「心の問題は解決したからやることができた。怪我をしたのは本人の技術不足」と自らの心理学的な研究成果の正当性を守れるのだろうか。一人の人間の運動問題を切り刻み、上手いかなと専門分野が違くと逃げてしまう。いつも取り残されるのは現場の選手と指導者である。

自己運動として我々がある運動を習得できるのは、身体がその運動を了解したとき、つまり、身体がそれを自分の〈世界〉へと合体したときである。我々が運動ができるとき、それはあらかじめその対象が身体にとって存在しているのだから<sup>(20)</sup>。つまり、すでに行うべき動感形態が動感身体に全体として了解されていなければならない。我々の自己運動は常に先行する動感形態と一対となるから「私は動くことができる」のである。

失行症患者の症例の厳密分析では、「身体は自分の世界をもっていて対象と空間とかは我々の認識に現前していても我々の身体の方には現前しないこともあり得る<sup>(21)</sup>」のであり、それは健常者の我々においても起こりうることなのである。先行する動感形態の志向性に何らかの障害が生じることによって、我々は「動くことができない」ことになる。今回の例証が「いつもできない」のであれば別の問題を探る必要もあるが、「できるときもあるし、できないときもある」から運動指導

者がそれに応じて治療せざるをえなくなる。

競技会が終了し普段の練習に戻ったとき、この選手は試合で曲がりなりにも成功した動感形態が再び「怖くてできない」という状況に陥った。強い動感地平の充実によって動感形態が発生したあと、生ぬるい状況の中ではどんなに正しい「私のコツ」でもそれを支える地平は充実してこない。その充実を目的として再び習練に向かえばよいのだが、それはなかなか難しく、「試合になればできる」といって練習を避けてしまうこともある。

今回の問題点を動感分析論の立場からまとめてみると、直接幫助で習得し習慣的匿名性に埋没していた後転とびの身体知は、「うまくできない」という本人の価値意識の変化とその能動的志向性によって掘り起こされたことになる。しかし、そこでは動感形態の縁どりを支える動感素材の欠落が充実を阻害している。身体知発生は動感素材を取捨選択しながら動感形態の形成を可能にする。匿名的な動感素材の取捨選択から価値意識の変化と共に、能動的な動感素材の取捨選択へと身体知が充実していく。引き寄せてはならない動感素材や、まだ持ち合わせていない動感素材を探り出すことによってやっと動感メロディーが奏でられる。今後もこの選手の技の修正活動は継続していくが、今回の例証分析は身体知形成過程の「動感形態の解消」という現象領野の問題性を示しているといえるのであろう。

#### 付記

本研究は平成21年度東京女子体育大学実践研究活動補助費による研究成果の一部である。

#### 引用・参考文献

- (1) ヴァイツゼッカー/木村敏・濱中淑彦訳(1995):『ゲシュタルトクライス』みすず書房 291頁以降
- (2) 金子一秀(1992):「運動の生活史をどうとらえるか」『運動学講義』第II部 大修館書店 232頁以降
- (3) 日本体操協会(2009):『採点規則 体操競技

- 女子 2009年版』27頁
- (4) ヴァイツゼッカー(1995):前掲書 221頁
- (5) ヴァイツゼッカー(1995):上書 221頁
- (6) 金子明友(2002):『わざの伝承』明和出版  
526頁
- (7) 木村敏(2008):『異常の構造』  
講談社現代新書 23頁
- (8) 金子一秀(1998):「君のコツへの架橋性」  
スポーツモルフォロジー研究4 日本スポーツ  
モルフォロジー学会 25頁以降
- (9) クルト・マイネル/金子明友訳(1981):『マイ  
ネル スポーツ運動学』大修館書店 160頁
- (10) メルロー=ポンティエー/竹内芳郎・小木貞孝訳  
(1970):『知覚の現象学I』みすず書房  
233頁
- (11) 廣松 渉(1988):『哲学入門一歩前』  
講談社現代新書 58頁以降
- (12) クルト・マイネル(1981):前掲書 405頁
- (13) 金子明友(2007):『身体知の構造』明和出版  
193頁
- (14) 金子明友(2007):上書 146頁
- (15) メルロー=ポンティエー(1970):前掲書 235頁
- (16) ヴァイツゼッカー(1995):前掲書 31頁
- (17) 金子明友(2007):前掲書 146頁
- (18) 金子一秀(2003):「キネステーゼ構造の発生  
運動学的考察」伝承3号 運動伝承研究会  
61頁
- (19) 金子明友(2005):『身体知の形成(上)』  
291頁以降
- (20) メルロー=ポンティエー(1970):前掲書 233頁
- (21) メルロー=ポンティエー(1970):上書 233頁